香港便り その36

トウシューズダンサーとバレエシューズダンサー

文 高野 陽年
text by Yonen Takano

「トウシューズダンサーは右手から、バレエシューズダンサーは左手から」そう振付の指示を受けた時、一体何のことだかよく分からなかった。アメリカから来た振付助手はどうやら女性ダンサーのことをトウシューズダンサー、男性ダンサーのことをバレエシューズダンサーと呼んでいるようだった。古典バレエでは一般的に女性は主にトウシューズと呼ばれる木製の硬い靴を履いて踊り、男性は布生地の柔らかいバレエシューズを履く。だが香港バレエのヴァカンスは終わったばかりで、本来ならトウシューズを履くべきダンサーたちも調整のためバレエシューズを履いていたりして、僕らはさらに混乱した。

一体なぜ彼女は僕たちを困惑させるのだろうか。それはアメリカ的ポリティカルコレクトネスに由縁する。アメリカでは外見によってジェンダーを区別せずに個人の性自認に対して寛容であろうとする文化が根付きつつある。だからこそ「女性ダンサーは右手から、男性ダンサーは左手から」ではなくてトウシューズダンサー、バレエシューズダンサーとなったようだ。僕は今さっき振付助手のことを彼女と書いてしまったがもしかすると違うかもしれない。

確かに性自認は個人の自由で権利は守られるべきであるのは当たり前だと思うが、ジェンダーロールが固定され、それを分かった上で上演される古典バレエのような場所でわざわざややこしくするのも気疲れする。その振付助手は「She, He」が使えないために彼女、彼を表すための修飾語がどんどん長くなり、しまいには一人ずつ「YOU」と言って説明し始める。面と向かっていちいちYOUと言われるのも子供扱いされているようで、決していい気分ではない。しかしながら、ポリティカルコレクトネスをケアできないようなら、キャンセルされてしまうのがアメリカなのである。

あるキューバ人のダンサーがテキサス州で仕事を得た。彼の母国の社会主義政策について肯定的な発言を同僚の間でしたところ、人事部に呼び出されて厳重注意を受けたようだ。知り合いの学者がSNS上で親パレスティナ発言をしたところ、学会から追放されたとも聞く。

香港には政治的自由がないとよく批判されるが、キャンセルされてしまうのならばアメリカもそこまで変わらない。良いか悪いかは別として発言をそこまで気にせずに生きていけるのは政見放送で服を脱ぐことができる日本くらいなのではないだろうか。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。ヨーロッパ、北米、日本を含めさまざまな劇場における公演で主役を務めた。そして2021年7月より香港バレエ団に活動の拠点を移し、さらに活躍の場を広げている。立教大学中退。